

「助産婦」をつくりたい

三砂ちづる

国際協力事業団(JICA)ブラジル家族計画母子保健プロジェクト疫学専門家

私たち JICA プロジェクトチームが働く北東ブラジル(ノルデステ)には、優秀な産科医はいても、プロの助産婦はいない。中産階級の女性たちは、病院で日時を指定し、産科医のもとで帝王切開、貧しい女性たちは、適切な介助なしに不安なお産をする。ここノルデステの女性たちが安全で人間的な環境のもとで子供を産めるようになること—Safe Motherhood 確立のお手伝いをするのが、われわれの仕事である。「助産婦」という職種をつくるのがかなめとなる。

では、どのようなビジョンで新しい職種をつくっていくのか。次の世紀に向けて、この職種にどのような役割を期待するのか。世界中で性と生殖にかかわる関係性が多様化していく今、助産婦という職種に、お産のケアのみでなく、新たな役割が期待されていることに気づく。私たちがモデルとする日本の助産婦さんへの思いが深まっていく。

産むのか、産まないのか、なぜ産まないのか、なぜ産めないのか。生殖年齢にある限り、女はいつもこの問題と向き合わねばならない。常にゆれ続ける性と生殖にかかわる思いは、もちろん自分の最も親しいパートナーと分かち合えれば、その人に気持ちのゆれを受け止めてもらうこともできる。でも、いつも女たちがそのような関係を築いていかれるとも限らない。また、豊かな関係にあるパートナーがいたとしても、ある日突然、抗いがたい恋におちいることがありえないと誰がいえよう。多様化していく社会で、多様化していく関係は、女

たちに性と生殖にかかわる孤独な戦いを強いていくだろう。

結婚してから子供を産むという社会規範は、もう私たちを守ってはくれない。現在、情報はあふれるほどあり、自分の人生を自分で選んでいきたい、という女性はどうも増えている。一人ひとりが、自分の人生を選んでいける、ということはすばらしいことだ。しかし、それは同時に、社会規範の保護から外れていくことを意味する。選択は私たちの手の内にある、ということは、一人で負わねばならない責任も増えることだ。

性と生殖にかかわる体と心の問題は、一人で背負うにはあまりに重い。だからこそ、「プロ」に女たちの性と生殖にかかわる体と意思を支えてもらいたいと思う。今までの規範を超えて、21 世紀の助産婦には、この女たちの気持ちのゆれを受け止められるような役割を担ってもらいたい。プロとして、女たちのリプロダクティブサイクルを支え、ともに歩いてもらいたい。そのようなプロは、助産婦以外考えられない。

そのためには、助産婦さん、あなた自身、豊かな感性で、ひとと世界を愛してください。女たちのどんな人生も、どんな理不尽な感情も、それに伴うからだの変化も、しなやかな心で支えられるように……。そして時折、ブラジルで育とうとしている新しい「助産婦」という職種のことを思い出して、あなたの力をお貸しください。

